

立山弥陀ヶ原・大日平

(たてやまみだがはら・だいにちだいら)

位置：北緯36度34.5分、東経137度32分／標高：1,040～2,120m／面積：574ha／湿地のタイプ：雪田草原、溪谷、滝／保護の制度：国立公園特別保護地区／所在地：富山県立山町／登録：2012年7月／国際登録基準：1

湿地のタイプ：雪田草原、溪谷、滝



弥陀ヶ原の全景 (写真：佐藤武彦)

称名滝 (写真：太田道人)

湿地の概要

富山県立山町にある立山弥陀ヶ原・大日平は、雪田草原の広がる平坦地と豊富な水量を誇る称名溪谷および称名滝からなる。標高1,040～2,120m、亜寒帯湿潤気候に属するこの地の年間降水量は5,000～6,000mmにも達し、平均積雪量は5m、根雪期間は11月中旬から6月下旬の200日余にも及ぶ。

立山弥陀ヶ原・大日平は、過去の火山活動によって形成されたなだらかな「溶岩台地」上に広がり、寒冷な気候と豪雪、豊富な水、強風の影響を受けて成立した湿地に、「餓鬼(ガキ)の田」と呼ばれる池塘約1,000個を含む風衝地湿性草原が展開し、開放的な景観を見せている。また、弥陀ヶ原・大日岳の水を集め一気に流れ落ちる「称名滝」は、落差350mと日本一。立山連邦を含む弥陀ヶ原・大日平一帯は中部山岳国立公園の一部で、称名滝は国指定名勝・天然記念物にも指定されている。

弥陀ヶ原の動植物：

弥陀ヶ原・大日平は、ショウジョウスゲ、ミヤマヌノハナヒゲ、ヌマガヤ等による典型的な湿原植生で、階層構造的には草本層だけで構成されている。ここにはイワイチョウ、モウセンゴケ、ネバリノギラン、コイワカガミのほか、シロウマチドリ、ダケスゲ等絶滅危惧種も多く生育する。池塘の中にはミヤマホタルイの植物群落が見られ、また微高地にはハッコウダゴヨウ、オオコメツツジ等の風衝地の低木林や、オオシラビン、ミネカエデ等が生育

し、部分的にチマキザサが入る。鳥類では、草原と林縁環境を好むカッコウやホオジロ等が生息し、また絶滅危惧種であるライチョウの越冬地ともなっている。

山岳信仰の地、弥陀ヶ原を訪問する人々：

富士山、白山とならぶ「日本三霊山」の1つとして古くから栄えた立山は、地獄と極楽の世界観を体現するものとみなされてきた。「餓鬼の田」は陽の光に鈍く輝くミヤマホタルイを稲に見立て、立山の地獄に堕ちた「餓鬼」が飢えをしのぐために田植えをする場所に見立てられた名称である。また、「称名滝」は、滝の轟音が念仏の称名に似ていることから命名されたといわれ、立山の大自然を信仰の対象とした象徴の1つである。

現在は、富山県立山町と長野県大町市を結ぶ立山黒部アルペンルートが開通し、標高2,450mの室堂平まで交通機関を使って行くことができ、ルート沿線は自然探勝や自然学習、周辺の山岳登山等で訪れる人々で賑わっている。

また、弥陀ヶ原は木道が整備され、主に自然探勝を目的に年間約4万人の一般観光客が訪れ、地元ガイドによる解説も行われている。称名滝へはマイカーでのアクセスが容易で、落差日本一の滝を間近に眺望することができる。これに対し、大日岳への登山ルートの一部



となっている大日平は、登山者向けの場所ので、周辺を散策するには山小屋に宿泊する必要がある。

飲料水としての称名川の水：

称名滝の水は称名川へと流れ、やがて常願寺川となり、その水は上水として周辺地域で利用されている。集水域に降った雪や雨が地下に浸透し、立山黒部アルペンルートの玄関口「立山駅」で湧き出る水は、まろやかで口あたりもよく、ペットボトル飲料としても販売されている。

●関係自治体

立山町役場 Tel: 076-463-1121

